様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成２７年　６月　３日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７３０５９１

研究課題名（和文）意図性を基軸とした反社会的行動に関する総合的研究

研究課題名（英文）Behavior making mental processes at different levels of intentionality predicting antisocial behaviors

研究代表者
吉澤　寛之（YOSHIZAWA, Hiroyuki）

岐阜大学・教育学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：７０４４９４５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、犯罪や非行、攻撃行動などの反社会的行動に至る行動決定過程を意図性の観点から分類し、各過程による説明力の差異を明らかにした。さらに、行動決定過程と常習反社会性との関連を、再犯者と非再犯者や一般少年との比較分析や、サイコパシーとの関連分析により明らかにした。続いて、再犯性の予測や矯正プログラムの改善への貢献を視野に入れ、行動決定過程についての査定バッテリーを開発した。

研究成果の概要（英文）：This project classified behavior making mental processes eliciting antisocial behaviors into three different levels of intentionality and compared the predictive power of these three processes for antisocial behaviors. The influences of behavior making mental processes on recidivism were revealed by comparing these processes of repeat offenders to those of first offenders and junior-high school students, and examining the relationship to psychopathic tendencies. Finally, an assessment battery of behavior making mental processes was developed as a tool for predicting recidivism risks, and improving correctional interventions.

研究分野：社会心理学、犯罪心理学、教育心理学

キーワード：社会系心理学　教育系心理学　反社会的行動　行動決定過程　社会的情報処理　自己制御　実行認知機能　サイコパシー

１．研究開始当初の背景

平成 21 年中の刑法犯および刑法犯少年の検挙人員は減少傾向にあるものの高い水準を維持し（警察庁, 2010）、児童・生徒の暴力行為の発生状況は近年顕著な増加傾向にある（内閣府, 2009）。なかでも、刑事司法手続きの各段階で 5 割前後を占める再犯者の問題は深刻であり、平成 21 年版犯罪白書において「再犯防止施策の充実」といった特集が設けられるなど、再犯者が社会に与える脅威と被害は極めて大きい（法務省法務総合研究所, 2010）とされる。常習犯罪者により全一般犯罪の 50%、凶悪犯罪の 70%が行われているという報告（大渕, 2006）もなされており、こうした再犯者・常習犯罪者の犯行に至る心的過程を明確化することは犯罪件数の減少のために急務の課題である。

これまでの研究では、犯罪白書などにおいても指摘のある非行少年の社会を捉える認識の問題としての社会的情報処理の誤りや歪みと、利己的な行動をコントロールする際の問題としての自己制御能力の低下に着目し、これらの要因と反社会的行動との関連を検討してきた。また、情報処理や自己制御への影響要因として、親の養育態度やしつけ、地域共同体における集合的有能感や共同体暴力との関連を検討してきた。

これらの研究は、反社会的行動を導く社会的情報処理や自己制御などの社会性の問題を明確化するだけではなく、こうした能力を高める環境からの働きかけに関する具体的示唆を提供したという点で一定の成果を得た。しかし、反社会的行動を行う者の意思決定や行動決定における意識的な側面のみを検討してきた問題が指摘できる。多様な社会的行動が無意識的・自動的な意思決定により導かれる（Bargh & Chartland, 1999）ことから、近年反社会的行動に関する研究においても、自動的処理が及ぼす影響が明らかにされ始めている（e.g., Bargh & Raymond,1995; Berkowitz, 2008; Todorov & Bargh, 2002）。意識的処理よりも自動的処理による攻撃行動の予測力が高いという指摘がなされる（Richetin & Richardson, 2008）など、意思決定の自動性が反社会的行動に果たす重要な役割が示唆されている。

加えてこれまでの研究では、反社会的行動の意図的な選択と認知・情動・行動制御における機能的な欠陥とが明確に区分されていないという問題もある。攻撃性研究では、道具的攻撃性と敵対的攻撃性といった区分（e.g., Berkowitz, 1993, 1998; Dodge, 1991）がなされているが、こうした区分は前者を意図的な行動の選択、後者を自らの情動や表出行動の制御における失敗と捉えなおすことができる。

２．研究の目的

本研究では、反社会的行動に至る行動決定過程に意図性の観点から 3 つの異なる過程を弁別する。第 1 の過程は道具的攻撃性に代表される意図的な行動選択過程であり、随意性行動決定と命名する。第 2 の過程は意識的な過程であるものの、行為者の行動に対する統制感が欠如した認知・情動・行動制御における機能的欠陥により生じる過程であり、機能欠陥行動決定と命名する。第 3 の過程は無意識的・自動的な過程であり、制御に失敗したという自覚の生じない過程であることから、不随意性行動決定と命名する。本研究では、意図性の観点から 3 過程を弁別し反社会的行動の予測性を比較する。その際、多くの反社会的行動に関わる常習反社会性の行動決定過程の解明を主眼とする。最終的に、再犯性の予測や矯正プログラムの改善に貢献する行動決定過程の分類に対応した査定・介入システムの構築に関する提言を行う。

これら 3 過程の反社会的行動への寄与を明らかにすることは、以下の点で有益だと考えられる。不随意性行動決定に基づく反社会的行動を弁別できることにより、再犯者の更生を目的とした矯正教育に新たな手掛かりを提供できる利点である。再犯の根本的な問題として、矯正教育を受けて一度は更生したかに見える者が、再犯を繰り返している現実がある（法務省法務総合研究所, 2010）。再犯者は、自らの行動の意思決定に意識的な過程、すなわち随意性行動決定が関わっていると認識しがちであるが、実際は機能欠陥行動決定や不随意性行動決定のプロセスに基づいている可能性がある。Aarts et al. (2009) は、無意識的に設定された目標で生じた行動にも関わらず、自分のとった行動の原因が意識的な目標により導かれると自己知覚してしまう self-agency 現象を確認している。こうした知見に基づくと、再犯者らは自らの反社会的行動が不随意性行動決定に基づき生起したにもかかわらず、それが随意性行動決定もしくは機能欠陥行動決定に基づくものと誤認してしまう恐れがある。その結果、施設入所中には意識的側面への介入プログラムに終始することで、その効果があったかのように見られるものの、根本的な不随意性行動決定が改善されないまま出所することで、再犯を繰り返してしまうと考えられる。本研究の 3 過程を弁別する試みは、反社会的行動を行う者の行動決定過程の差異に応じた介入の手がかりを提供するものであり、再犯者の問題に解決の糸口を見出すものである。

３．研究の方法

(1)　　反社会的行動の予測力の比較研究

本研究では、多サンプルへの実施を可能とする紙筆版潜在連合テスト（岡部他, 2004）を参考とした不随意性行動決定の測定法を開発した。随意性行動決定は個人が有する意図的な行動規範を反映した社会的ルールの知識構造や、認知的歪曲（吉澤・吉田, 2004）、

規範的攻撃信念（吉澤他, 2009）を用いて測定した。機能欠陥行動決定は、反社会的行動との関連が強い脳の前頭前野に局在する実行認知機能の評価尺度（Frontal Systems Behavior Scale; 吉住他, 2007）や神経心理学的検査（Behavioural Assessment of the Dysexecutive Syndrome）の DEX により測定した。扁桃体と関連の強い情動認知機能を評価する Six Emotional recognition Test（e.g., Sato et al., 2002）の日本語紙筆版、自己制御能力の欠陥（原田他, 2008）を併せて測定した。

アナログ研究として一般青年（中学生と大学生）を対象とした行動決定 3 過程と反社会的行動傾向との関連の検討と、一般青年と触法少年（少年鑑別所）とで 3 過程の差異を比較する研究を行った。

（2）　再犯者と非再犯者との比較研究

再犯者の矯正教育では、意識的側面に働きかける認知的介入やスキルなどの能力補完型の取組の効果には一定の限界があるが、こうした限界は行動決定 3 過程が弁別されていないことに起因する。再犯者も自分自身の気づかないレベルで行動決定をしている可能性は大きい。本研究では、行動決定 3 過程について、少年鑑別所入所の再犯者と非再犯者とで比較し検討した。

（3）　行動決定過程の発達的変化の検証

Moffit (1993) は、人生早期に発現し生涯にわたり継続する生涯型反社会性と、青年期限定の青年期型反社会性との分類を提唱したが、前者の問題には認知的能力が深くかかわっている（Piquero & White, 2003）。本研究ではアナログ研究を用い、行動決定 3 過程の発達的変化を検討した。

（4）　サイコパシーとの関連検討

サイコパスは、情動面、対人関係面、行動面の複合的成分から構成される障害であり、脳の機能不全から反社会的行動を説明する概念として多くの研究がなされている。しかし、彼らの反社会的行動の直接的動機である道具的性質は、機能不全のみにより説明されるわけではない。本研究では、アナログ研究と施設入所者対象の研究を併用し、行動決定 3 過程とサイコパス傾向（サイコパシー）測定尺度（Levenson et al., 1995）の邦訳版との関連を検討した。

（5）　査定バッテリーの開発研究

上述の研究で開発された行動決定 3 過程の測定法を発展させ、法務技官などが簡易的に活用できる査定バッテリーを開発した。行動決定過程の弁別により、再犯リスクの効率的な査定が可能となる。不随意性行動決定の測定方法の簡略化が重要となるが、紙筆版潜在連合テストなどを用いて集団実施を可能とした。

４．研究成果

（1）　反社会的行動の予測力の比較研究

不随意性行動決定過程を測定する方法として反社会性潜在連合テストの紙筆版を開発し、大学生対象に併存的妥当性をパソコン版との関連から確認した。また、鑑別所入所少年と中学生を対象に潜在的反社会性と認知的歪曲、規範的攻撃信念、非行経験との関連を検討した結果、非行経験のみとの関連が認められ、他指標と異なる独自の説明力を有することが明らかになった。鑑別所入所少年と中学生との比較では、潜在的反社会性の指標において鑑別所入所少年の得点が有意に高いことも確認された。

（2）　再犯者と非再犯者との比較研究

上述の鑑別所入所少年と中学生を対象とした調査データを用い、再入所群、初入所群、中学生群の 3 群を基準変数、3 つの行動決定過程に該当する各指標を説明変数にしたロジスティック回帰分析を行った。その結果、潜在的反社会性は独自の群説明力を有しており、再犯リスクの予測に有効であることが明らかとなった。

（3）　サイコパシーとの関連検討

一般中学生を対象に、機能欠陥行動決定過程を統制した上で、随意性行動決定過程によるサイコパシーの予測力が存在するか否かを検討した。分析の結果、機能欠陥行動決定過程に該当する前頭葉機能および扁桃体機能の統制後も、随意性行動決定過程に該当する社会的情報処理指標とサイコパシー指標とに多くの有意な関連が残り、特にサイコパシーの一次性特性（情緒性の欠如）と自己中心的な認知の歪みや一般攻撃信念との間に強い関連が存在した。したがって、機能欠陥行動決定過程とは異なる予測力が随意性行動決定過程に存在することが明らかにされた。

不随性行動決定過程である潜在的反社会性との関連の分析結果では、潜在的反社会性と一次性サイコパシーとの間に有意な正の関連が認められた。

（4）　行動決定過程の発達的変化の検証

随意性行動決定過程である社会的情報処理の発達的変化は、青年期型反社会性の発達的変化に対応させた分析を行う前提として検討する必要があった。そのため、社会的情報処理の発達的変化に関して得られた知見を、学術誌（応用心理学研究）にて報告した。中学生と高校生とを対象とした比較検討の結果、高校生において知識構造の構造的側面の指標が高い値を示し、認知的歪曲の指標が低い値を示していた。両サンプルを比較する構造方程式モデリングを用いた分析を実施した結果、高校生においてのみ、知識構造の構造的側面が認知的歪曲を媒介して社会的

行動の適応性を促進することが明らかとなった。本結果から、青年期後期における適応的な社会的行動を説明する上で、随意性行動決定過程における知識構造の構造的側面が重要な役割を果たすとする示唆が得られた。

（5）　査定バッテリーの開発研究

これまでの研究で開発・実施された各測定法を簡易化し、音声教示 CD を用いてどのような実施環境で、どのような実施者でも実施ができる行動決定過程の査定バッテリーを開発した。音声教示 CD と測定法ブックレットをパッケージ化した試作版を完成させた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）

① 吉澤寛之 (2015). 反社会的行動・精神的健康の先行要因としての社会的情報処理・自己制御―疑似相関の可能性の検証― 岐阜大学教育学部研究報告人文科学, **63**, 173-181. 査読無

② 吉澤寛之(第 1 著者)他 5 名 (2014). 地域防災に寄与する集合的有能感の醸成―マルチレベル分析を用いた検討― 東海心理学研究, **8**, 12-19. 査読有

③ 原田知佳・吉澤寛之（第 2 著者）他 4 名 (2014). 日・韓・中・米における社会的自己制御と逸脱行為との関係　パーソナリティ研究, **22**, 273-276. 査読有 DOI: 10.2132/personality.22.273

④ 吉澤寛之・吉田俊和 (2012). 中学生と高校生における社会的情報処理の比較―社会的適応の観点からの検討― 応用心理学研究, **38**, 122-133. 査読有

⑤ 朴 賢晶・吉澤寛之（第 4 著者）他 4 名 (2012). 地域社会が中学生の問題行動に及ぼす影響―規範意識の低下が引き起こす学校の荒れに着目した検討― 犯罪心理学研究, **49**(2), 39-50. 査読有

⑥ Gini, G., Camodeca, M., Caravita, S. C. S., Onishi, A., & Yoshizawa, H. (2011). Cognitive distortions and antisocial behaviour: An European perspective. 甲南大学紀要文学編, (161), 209-222. 査読有 https://konan-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=1040&file_id=22&file_no=1

⑦ 吉田琢哉・吉澤寛之（第 3 著者）他 4 名 (2011). 地域住民との交流が中学生の反社会的態度の抑制に及ぼす影響―集合的有能感と社会的自己制御による媒介モデルの検討― 東海心理学研究, **5**, 26-32. 査読有

〔学会発表〕（計４０件）

① 吉澤寛之　潜在的反社会性測定法の開発と併存的妥当性の検討―Single Category IAT に基づく紙筆版測定法とパソコン版測定法の関連分析―　日本パーソナリティ心理学会、2014 年 10 月 5 日、山梨大学（山梨県・甲府市）

② 吉澤寛之　パーソナリティによる反社会的行動の説明―その限界と可能性―（シンポジウム企画者・司会者）　日本パーソナリティ心理学会、2014 年 10 月 5 日、山梨大学（山梨県・甲府市）

③ 吉澤寛之　潜在的反社会性と反社会的行動傾向の関連　日本犯罪心理学会、2014 年 9 月 7 日、早稲田大学（東京都・新宿区）

④ 吉澤寛之・福井裕輝　中学生におけるサイコパス特性と社会的情報処理の関連（2）―扁桃体機能を統制した検討―　日本パーソナリティ心理学会、2013 年 10 月 12 日、江戸川大学（千葉県・流山市）

⑤ Yoshizawa, H., & Fukui, H. *Social information processing as a predictor of psychopathy: Controlling for frontal lobe and amygdala functions*. Individual paper session presented at the 2013 Conference of the International Society for the Study of Individual Differences, 2013 年 7 月 22 日, Barcelona, Spain.

⑥ 吉澤寛之・福井裕輝　中学生におけるサイコパス特性と社会的情報処理の関連―前頭葉機能を統制した検討―　日本パーソナリティ心理学会、2012 年 10 月 7 日、島根県民会館（島根県・松江市）

⑦ 吉澤寛之　Social Psychological Perspectives on the Development of Antisocial Youth.（青年における反社会性の発達への社会心理学的視点）（シンポジウム企画者・話題提供者）　日本社会心理学会、2011 年 9 月 18 日、名古屋大学（愛知県・名古屋市）

〔図書〕（計６件）

① 吉澤寛之・大西彩子・ジニ, G.・吉田俊和（第 1 編著） (2015). ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動―その予防と改善の可能性―　北大路書房　総 270 頁

② 吉澤寛之 (2015). 第 3 章 6 節 反社会的行動とサイコパス―理論的統合に向けた論考　有光興記・藤澤 文（編） モラルの心理学―理論・研究・道徳教育の実践―　北大路書房　pp. 116-127. 総 273 頁

③ 吉澤寛之（訳） (2014). 項目番号 10 領域 6 青年期におけるいじめ・被害者の問題（Bully/Victim Problems during Adolscence）　青年期発達百科事典編集

委員会（編） 青年期発達百科事典（Encyclopedia of Adolescence） 丸善株式会社 pp. 9-19. 総 1568 頁

④ 吉澤寛之 (2013). 第 5 章 攻撃性 吉田俊和・三島浩路・元吉忠寛（編） 学校で役立つ社会心理学 ナカニシヤ出版 pp. 35-42. 総 166 頁

⑤ 吉澤寛之 (2013). 第 15 章 集合的有能感 吉田俊和・三島浩路・元吉忠寛（編） 学校で役立つ社会心理学 ナカニシヤ出版 pp. 119-126. 総 166 頁

⑥ 吉澤寛之 (2013). 第 15 章第 1 節 非行・犯罪 二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・藤田主一・小塩真司・渡邊芳之（編） パーソナリティ心理学ハンドブック 福村出版 pp. 445-451. 総 782 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

https://aris2.gifu-u.ac.jp/profile/ja.e66i44.html

６．研究組織

(1)**研究代表者**

吉澤　寛之（YOSHIZAWA, Hiroyuki）

岐阜大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：７０４４９４５３

(2)**研究分担者**

(　　)

研究者番号：

(3)**連携研究者**

(　　)

研究者番号：